

# 檜ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

青空文庫



櫛ノ木大学士は宝石学の専門だ。

ある晩大学士の小さな家へ、

「貝の火けいてい兄弟商会」の、

赤鼻の支配人がやって来た。

「先生、ごく上等のたんぱくせき蛋白石の注文があるのですがどうでしょう、お探しをねがえませんでしょうか。もつともごくごく上等のやつをほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方とほうもない成なりきん金ですから、ありふれたものじゃなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくわえ、

雲母紙うんもしを張った天てんじょう井を、

斜ななめに見上げて聴きいていた。

「たびたびご迷めい惑わくで、まことに恐おそれ入りますが、いかがなものでございましょう。」

そこで櫛ノ木大学士は、

にやつと笑つて葉巻をとつた。

「うん、探してやろう。蛋白石のいいのなら、流紋玻りゆうもんはり璃はりを探せばいい。探してやろう。僕ぼくは實際、一ぺんさがしに出かけたら、きつともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして宝石のある山へ行くと、奇きたい体に足が動かない。直覚だねえ。いや、それだから、却かえつて困ることもあるよ。たとえば僕は一千九百十九年の七月に、アメリカのジャイアントアーム会社の依い嘱しよくを受けて、紅宝ルビー玉いを

探しにビルマへ行つたがね、やっぱりいつか足は紅<sup>ル</sup>宝<sup>ビー</sup>玉の山へ向く。それからちやんと見<sup>み</sup>附<sup>つ</sup>かつて、帰ろうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と寶石には、一種の不思議な引力が働いている、深く埋<sup>うず</sup>まつた紅<sup>ル</sup>宝<sup>ビー</sup>玉どもの、日光の中へ出たいというその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだろうね。その時も實際困つたよ。山から下りるのに、十一時間もかかつたよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅<sup>ル</sup>宝<sup>ビー</sup>玉坑<sup>こう</sup>さ。」

「ははあ、そいつはどうもとんだご災難でございました。しかしいかがでございましょう。こんども多分はそんな工<sup>ぐ</sup>合<sup>あい</sup>に参<sup>ま</sup>りましようか。」

「それはもうきつとそう行くね。ただその時に、僕が何かの都<sup>つ</sup>合<sup>ごう</sup>

のために、たとえばひどく疲つかれているとか、狼おおかみに追われているとか、あるいはひどく神経が興奮しているとか、そんなような事情から、ふつとその引力を感じないというようなことはあるかもしれない。しかしとにかく行つて来よう。二週間目にはきつと帰るから。」

「それでは何分お願いいたします。これはまことに軽少ですが、当座の旅費のつもりです。」

貝の火兄弟商会の、

鼻の赤いその支配人は、

ねずみ色の状じょうぶくろ袋ぶくろを、

上着の內衣うちポケット囊から出した。

「そうかね。」

大学士は別段気にもとめず、手を延ばして状袋をさらい、自分の衣囊かぶしに投げこんだ。

「では何分とも、よろしくお願いいたします。」

そして「貝の火兄弟商会」の、

赤鼻の支配人は帰って行つた。

次の日諸君のうちの誰たれかは、

きつと上野の停車場ていしやばで、

途方もない長い外套がいとうを着、

変な灰色の袋のような背囊はいのうをしよい、

七キログラムもありそうな、

素敵すてきな大きななづちを、

持しんしつた紳士を見ただろう。

それは櫓の木大学士だ。

宝石を探しでに出掛けたのだ。

出掛けた為ためにとうとう櫓ノ木大学士の、

野宿ということも起つたのだ。

三晩というもの起つたのだ。

## 野宿第一夜



四月二十日の午後四時頃、

例の櫓ならノ木大学士が

「ふん、この川筋があやしいぞ。たしかにこの川筋があやしいぞ」とひとりぶつぶつ言いながら、

からだを深く折り曲げて

眼めいっばい一杯いっばいにみひらいて、

足もとの砂利じゃりをねめまわしながら、

兎うさぎのようにひよいひよいと、

葛くずまる丸川の西岸の

大きな河原をのぼって行つた。

両側けわはずいぶん峻けわしい山だ。

大学士はどこまでも溯のぼつて行く。

けれどもとうとう日も落ちた。

その両側の山どもは、

いっしょうけんめい

一 生懸命いっしょうけんめいの大学士などにはお構いなく

ずんずん黒く暮くれて行く。

その上にちよつと顔を出した

遠くの雪の山脈は、

さびしい銀いろに光り、

てのひらの形の黒い雲が、

その上を行ったり来たりする。

それから川岸の細い野原に、

ちよろちよろ赤い野火が這い、

鷹たかによく似た白い鳥が、

鋭すく風を切つて翔かけた。

櫛ノ木大学士はそんなことには構わない。

まだどこまでも川を溯つて行こうとする。

ところがとうとう夜になった。

今はもう河原の石ころも、

赤やら黒やらわからない。

「これはいけない。もう夜だ。寝ねなくちやなるまい。今夜はずい

ぶん久しぶりで、愉快ゆかいな露天ろてんに寝るんだな。うまいぞうまいぞ。

ところで草へ寝ようかな。かれ草でそれはたしかにいいけれども、

寝ているうちに、野火にやかれちやいちごん一言もない。よしよし、この石へ寝よう。まるでね台だ。ふんふん、実に柔やわらかだ。いい寝台だいだぞ。」

その石は実際柔らかで、  
又敷布またしきふのように白かった。

そのかわり又大学士が、  
腕うでをのばして背囊をぬぎ、  
肱ひじをまげて外套のまま、

ごろりと横になったときは、  
外套のせなかに白い粉が、  
まるで一杯についたのだ。

もちろん学士はそれを知らない。

又そんなこと知ったとこで、

あわてて起きあがる性質でもない。

水がその広い河原の、

向う岸近くをごうと流れ、

空のききょう桔梗のうすあかりには、

山どもがのつきのつきと黒く立つ。

大学士は寝たままそれをなが眺め、

又ひとりごとを言い出した。

「ははあ、あいつらはがんけい岩頸だな。

岩頸だ、岩頸だ。

相そう違いない。」

そこで大学士はいい気になって、

仰向あおむけのまま手を振ふって、

岩頸の講義をはじめ出した。

「諸君、手っ取り早く云いうならば、岩頸というのは、地殻ちかくから一ちよつとくび

寸頸を出した太い岩石の棒である。その頸がすなわち一つの山である。ええ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なもの

ができたというなら、そいつは蓋けだし簡単だ。ええ、ここに一つの

火山がある。熔よう岩がんを流す。その熔岩は地殻の深いところから太

い棒になつてのぼつて来る。火山がだんだん衰おとろえて、その腹の中

まで冷えてしまう。熔岩の棒もかたまつてしまう。それから火山

は永い間に空気や水のために、だんだん崩くずれる。とうとう削けずられて

へらされて、しまいには上の方がすっかり無くなつて、前のか

たまった熔岩の棒だけが、やつと残るといふあんばいだ。この棒は<sup>たいてい</sup>大抵頸だけを出して、一つの山になっている。それが岩頸だ。ははあ、面白<sup>おもしろ</sup>いぞ、つまりそのこれは夢<sup>ゆめ</sup>の中のもやだ、もや、もや、もや、もや。そこでそのつまり、鼠<sup>ねずみ</sup>いろの岩頸だがな、その鼠<sup>ねずみ</sup>いろの岩頸が、きちんと並<sup>なら</sup>んで、お互<sup>たがい</sup>に顔を見合せたり、ひとりで空うそぶいたりしているのは、大変おもしろい。ふふん。」

それは実際その通り、

向うの黒い四つの峯<sup>みね</sup>は、

四人兄弟の岩頸で、

だんだん地面からせり上つて来た。

櫛<sup>なら</sup>ノ木大学士の喜びようはひどいもんだ。

「ははあ、こいつらはラクシヤンの四人兄弟だな。よくわかった。

ラクシヤンの四人兄弟だ。よしよし。」

注文通り岩頸は

丁度胸までせり出して

ならんで空に高くそびえた。

一番右は

たしかラクシヤン第一子

まつ黒な髪かみをふり乱し

大きな眼をぎろぎろ空に向け

しきりに口をぱくぱくして

何かどなっている様だが



その声は少しも聞えなかつた。

右から二番目は

たしかにラクシヤンの第二子だ。

長いあごを両手に載せてねむ睡っている。

次はラクシヤン第三子

やさしい眼をせわしくまたたき

いちばん左は

ラクシヤンの第四子しし、末っ子だ。

夢のような黒い瞳ひとみをあげて

じつと東の高原を見た。

櫛ノ木大学士がもつとよく

四人を見ようと起き上つたら

俄にわかにラクシヤン第一子が

雷かみなりのように怒鳴どなり出した。

「何をぐずぐずしてゐるんだ。潰つぶしてしまえ。灼やいてしまえ。こな  
 ごなに砕くだいてしまえ。早くやれっ。」

櫛ノ木大学士はびっくりして

大急ぎで又横になり

いびきまでして寝たふりをし

そつと横目で見つづけた。

ところが今のどなり声は

大学士に云つたのでもなかつたようだ。

なぜならラクシヤン第一子は

やっぱり空へ向いたまま

素敵などなりを続けたのだ。

「全体何をぐずぐずしてるんだ。砕いちまえ、砕いちまえ、はね飛ばすんだ。はね飛ばすんだよ。火をどしやどしや噴くんだ。熔岩の用意っ。熔岩。早く。畜生。いつまでぐずぐずしてるんだ。熔岩、用意っ。もう二百万年たってるぞ。灰を降らせろ、灰を降らせろ。なぜ早く支度をしないか。」

しずかなラクシヤン第三子が

兄をなだめて斯う云った。

「兄さん。少しおやすみなさい。こんなしずかな夕方じゃありま

せんか。」

兄は構わず又どなる。

「地球を半分ふきとばしちまえ。石と石とを空でぶっつけ合せてぐらぐらする紫むらさきのいなびかりを起せ。まっくろな灰の雲からかみなりを鳴らせ。えい、意気地いっきなしども。降らせろ、降らせろ、きらきらの熔岩で海をうずめる。海から騰のぼる泡あわで太陽を消せ、生き残りの象から虫けらのはてまで灰を吸わせろ、えい、畜生ども、何をぐずぐずしてるんだ。」

ラクシヤンの若い第四子ししが

微笑わらつて兄をなだめ出す。

「大兄さん、あんまり憤おこらないで下さいよ。イーハトブさんが向

うの空で、又笑っていますよ。」

それからこんどは低くつぶやく。

「あんな銀の冠かんむりぼくを僕もほしいなあ。」

ラクシヤンの狂暴な第一子も

少ししずまつて弟を見る。

「まあいいさ、お前もしつかり支度をして次の噴火にはあのイーハトブの位になれ。十二ヶ月の中の九ヶ月をあの冠かざで飾かざれるのだぞ。」

若いラクシヤン第四子は

兄のことは聞きながし

遠い東の

雲を被<sup>かぶ</sup>つた高原を

星のあかりに透<sup>すか</sup>し見て

なつかしそうに眩<sup>つふ</sup>やいた。

「今夜はヒームカさんは見えないなあ。あのまっ黒な雲のやつは、ほんとうにいやなやつだなあ、今日で四日もヒームカさんや、ヒームカさんのおつかさんをマントの下にかくしてるんだ。僕一つ噴火<sup>ふんか</sup>をやつてあいつを吹き飛ば<sup>ふ</sup>してやろうかな。」

ラクシヤンの第三子が

少し笑つて弟に云う。

「大へん怒<sup>おこ</sup>つてるね。どうかしたのかい。ええ。あの東の雲のやつかい。あいつは今夜は雨をやつてるんだ。ヒームカさんも蛇<sup>じゃも</sup>

紋石んせきのきものがずぶぬれだろう。」

「兄さん。ヒームカさんはほんとうに美しいね。兄さん。この前ね、僕、ここからかたくりの花を投げてあげたんだよ。ヒームカさんのおつかさんへは白いこぶしの花をあげたんだよ。そしたら西風がね、だまって持って行って呉くれたよ。」

「そうかい。ハツハ。まあいいよ。あの雲はあしたの朝はもう霽はれてるよ。ヒームカさんがまばゆい新らしい碧あおいきものを着てお日さまの出るころは、きつと一番さきにお前にあいさつするぜ。そいつはもうきつとなんだ。」

「だけど兄さん。僕、今度は、何の花をあげたらいいだろうね。もう僕のところには何の花もないんだよ。」

「うん、そいつはね、おれの所にね、桜草さくらそうがあるよ、それをお前にやろう。」

「ありがとう、兄さん。」

「やかましい、何をふざけたことを云ってるんだ。」  
暴あらつぽいラクシヤンの第一子が

金粉の怒鳴り声を

夜の空高く吹きあげた。

「ヒームカってなんだ。ヒームカって。」

ヒームカって云うのは、あの向うの女の子の山だろう。よわむしめ。あんなものときあうのはよせと何べんもおれが云ったじゃないか。ぜんたいおれたちは火から生れたんだぞ青ざめた水の中



で生れたやつらとちがうんだぞ。」

ラクシヤンの第四<sup>しし</sup>子は

しよげて首を垂れたが

しずかな直<sup>じ</sup>かの兄が

弟のために長兄をなだめた。

「兄さん。ヒームカさんは血統はいいのですよ。火から生れたのですよ。立派なカンランガンですよ。」

ラクシヤンの第一子は

<sup>なおよさら</sup>尚 更怒つて

立派な金粉のどなりを

まるで火のようにあげた。

「知ってるよ。ヒームカはカンランガンギ。火から生れたさ。それはいいよ。けれどもそんなら、一体いつ、おれたちのようにめざましい噴火をやったんだ。あいつは地面まで騰のぼつて来る途とちゆう中で、もう疲つかれてやめてしまったんだ。今こそ地殻ちかくののろのろのぼりや風や空気のおかげで、おれたちと肩かたをならべているが、元来おれたちとはまるで生れ付きがちがうんだ。きさまたちには、まだおれたちの仕事がよくわからないのだ。おれたちの仕事はな、地殻の底の底で、とけてとけて、まるでへたへたになった岩がんしよ漿うや、上から押おしつけられて古綿こわたのようにちぢまった蒸気やらを取って来て、いざという瞬しゆんかん間かんには大きな黒い山の塊かたまりを、まるで粉々に引き裂さいて飛び出す。

煙けむりと火とを固めて空に抛なげつける。石と石とをぶっつけ合せてい  
なずまを起す。百万の雷を集めて、地面をぐらぐら云わせてやる。  
丁度、櫓ならノ木大学士というものが、おれのどなりをひよつと聞い  
て、びっくりして頭をふらふら、ゆすぶったようにだ。ハツハツ  
ハ。

山も海もみんな濃こい灰に埋うずまってしまふ。平らな運動場のようにな  
つてしまふ。その熱い灰の上でばかり、おれたちの魂たましいは舞踏ぶとうし  
ていい。いいか。もうみんな大きわぎだ。さて、その煙が納まっ  
て空気が奇麗きれいに澄すんだときは、こっちはどうだ、いつかまるで空  
へ届くくらい高くなつて、まるでそんなこともあつたかというよ  
うな顔をして、銀か白金かの冠ぐらいをかぶつて、きちんとすま

しているのだぞ。」

ラクシヤンの第三子は

しばらく考えて云う。

「兄さん、私はどうも、そんなことはきらいです。私はそんな、まわりを熱い灰でうずめて、自分だけ一人高くなるようなそんなことはしたくありません。水や空気がいつでも地面を平らにしよ  
うとしているでしょう。そして自分でもいつでも低い方低い方と  
流れて行くでしょう、私はあなたのやり方よりは、却かえつてあの方  
がほんとうだと思えます。」

暴あつぽいラクシヤン第一子が

このときまるできらきら笑った。

きらきら光って笑ったのだ。

(こんな不思議な笑いようを

いままでおれは見たことがない、

おどろ

愕くべきだ、立派なもんだ。)

櫛ノ木学士が考えた。

暴つぽいラクシヤンの第一子が

ずいぶんしばらく光ってから

やっとしずまって斯こう云った。

「水と空気かい。あいつらは朝から晩まで、俺おいらの耳のそばまで

で、世界の平和のために、お前らの傲ごうまん慢けんを削けずるとかなんとか云い

ながら、毎日こそこそ、俺こすらを擦こすって耗へらして行くが、まるつきり

うそさ。何でもおれのきくところに依ると、あいつらは海岸のふくふくした黒土や、美しい緑いろの野原に行つて知らん顔をして溝を掘るやら、濠をこさえるやら、それはどうも実にひどいもんだそうだ。話にも何にもならんというこつた。」

ラクシヤンの第三子も

つい大声で笑つてしまう。

「兄さん。なんだか、そんな、こじつけみたいな、あてこすりみたいな、芝居のせりふのようなものは、一向あなたに似合いませんよ。」

ところがラクシヤン第一子は

案外に怒り出しもしなかつた。

きらきら光って大声で

笑って笑って笑ってしまつた。

その笑い声の洪水こうずいは

空を流れて遥かに遥かに南へ行つて

ねぼけた雷かみなりのようにとどろいた。

「うん、そうだ、もうあまり、おれたちのがらにもない小理窟こりくつは

止よそう。おれたちのお父さんにすまない。お父さんは九つの氷河

を持っていらしやつたそうだ。そのころは、ここらは、一面の雪

と氷で白熊しろくまや雪ゆきぎつね狐つねや、いろいろなけものが居たそうだ。お

父さんはおれが生れるときなくなつたのだ。」

俄にわかにラクシヤンの末子まっしが叫ぶ。

「火が燃えている。火が燃えている。大兄さん。大兄さん。ごらんなさい。だんだんひろ拡がります。」

ラクシヤン第一子がびつくりして叫さけぶ。

「熔ようがん岩、用意つ。灰をふらせろ、えい、畜ちくし生しょう、何だ、野火か。」

その声にラクシヤンの第二子が  
びつくりして眼めをさまし、

その長い顎あごをあげて、

眼くぎを釘づけにされたように

しばらく野火をみつめている。

「誰たれかやったのか。誰だ、誰だ、今ごろ。なんだ野火か。地面の



挨拶ほこりをさらさらさらつと掃除そうじする、てまえなんぞに用はない。」

するとラクシヤンの第一子が

ちよつと意地悪そうにわらい  
手をばたばたと振ふつて見せて

「石だ、火だ。熔岩だ。用意つ。ふん。」

と叫ぶ。

ばかなラクシヤンの第二子が  
すぐ釣つり込まこれてあわて出し

顔いろをほつとほてらせながら

「おい兄貴、一吠ひとほえしようか。」

と斯こう云つた。

兄貴はわらう、

「一吠えつてもう何十万年を、きさまはぐうぐう寝ていたのだ。

それでもいくらかまだ力が残っているのか」

ぶしよう  
無精な弟は只一言

「ない」

と答えた。

そして又また長い顎をうでに載せ、

ぽっかりぽっかり寝てしまう。

しずかなラクシヤン第三子が

ラクシヤンの第四子ししに云う

「空が大へん軽くなったね、あしたの朝はきつと晴れるよ。」

「ええ今夜は鷹たかが出ませんね」

兄は笑つて弟をため試す。

「さっきの野火で鷹の子供が焼けたのかな。」

弟は賢かしこく答えた。

「鷹の子供は、もう余程よほど、毛も剛こわくなりました。それに仲々強いから、きつと焼けないで遁にげたでしょう」

兄は心持よく笑う。

「そんなら結構だ、さあもう兄さんたちはよくおやすみだ。櫛ならノ木大学士と云うやつもよく睡ねむっている。さつきから僕等ぼくらの夢ゆめを見ているんだぜ。」

するとラクシャン第四子が

ずるそうに一ちよつと寸笑つてこう云つた。

「そんなら僕一つおどかしてやろう。」

兄のラクシヤン第三子が

「よせよせいたずらするなよ」

と止めたが

いたずらの弟はそれを聞かずに

光る大きな長い舌を出して

大学士の額をべろりと嘗なめた。

大学士はひどくびびつくりして

それでも笑いながら眼をさまし

寒さにがたつと顫ふるえたのだ。

いつか空がすつかり晴れて  
まるで一面星が瞬またたき  
まっ黒な四つの岩頸がんけいが  
ただしくもとの形になり  
じつとならんで立っていた。

### 野宿第二夜

わが親愛な櫛ならノ木大学士は  
例の長い外がいとう套とうを着て  
夕陽ゆうひをせ中に一いっぱい杯浴びて

すつかりくたびれたらしく

度々たびたび空気に噛みつくような

大きな欠伸あくびをやりながら

平らな熊出街道かくまでいどうを

すたすた歩いて行つたのだ。

俄にわかに道の右側に

がらんとした大きな石切場が

口をあいてひらけて来た。

学士は咽喉のどをこくつと鳴らし

中に入つて行きながら

三角の石かけを一つ拾い

「ふん、ここもかくせんかこうがん角閃花崗岩」と

つぶやきながらつくづくと

あたりを見れば石切場、

石切りたちも帰ったらしく

小さなささ笹の小屋が一つ

淋さびしく隅すみにあるだけだ。

「こいつはうまい。丁度いい。どうもひとのうちの門かどぐち口に立って、もしもし今晚は、私は旅の者ですが、日が暮くれてひどく困っています。今夜一晩泊とめて下さい。たべ物は持っていますから支し度はなんにも要いりませんなんて、へつ、こんなこと云うのは、もう考えてもいやになる。そこで今夜はここへ泊ろう。」

大学士は大きな近眼鏡を

ちよつと直してにやにや笑い

小屋へ入つて行つたのだ。

土間には四つの石かけが

炉ろの役目をしその横には

櫓ほだもいくらか積んである。

大学士はマツチをすつて

火をたき、それからビスケットを出し

もそもそ喰たべたり手帳に何か書きつけたり

しばらくの間していたが

おしまいに火をどんだん燃して



ごろりと藁わらにねころんだ。

夜中になって大学士は

「うう寒い」

と云いながら

ばたりとはね起きて見たら

もうたきぎが燃え尽つきて

ただのおきだけになっていた。

学士はいそいでたきぎを入れる。

火は赤く愉快ゆかいに燃え出し

大学士は胸をひろげて

つくづくとよく暖る。

それから一寸外へ出た。ちよつと

二十日の月は東にかかり

空気は水より冷たかつた、

学士はしばらく足踏あしぶみをし

それからたばこを一本くわえマツチをすつて

「ふん、実にしずかだ、夜あけまでまだ三時間半あるな。」  
つぶやきながら小屋に入った。

ぼんやりたき火をながめながら

わらの上に横になり

手を頭の上で組み

うとうとうとうとした。

突とつ然ぜん頭の下のあたりで

小さな声で物を云い合つてゐるのが聞えた。

「そんなに肱ひじを張らないでお呉くれ。おれの横の腹に病気が起るじやないか。」

「おや、変なことを云うね、一体いつ僕ぼくが肱を張つたね」

「そんなに張つてゐるじやないか、ほんとうにお前まへこの頃ごろ湿し気けを吸つたせいかわどくのさばり出して来たね」

「おやそれは私のことだろうか。お前まへのことじやなかろうかね、お前もこの頃は頭でみりみり私わたしを押おしつけようとするよ。」

大学士は眼めを大きく開き

起き上つてその辺を見まわしたが

誰れも居らない様だった。

声はだんだん高くなる。

「何がひどいんだよ。お前こそこの頃はすこしばかり風を呑んだ  
せいか、まるで人が変わったように意地悪になつたね。」

「はてね、少しくらい僕が手足をのばしたつてそれをとやこうお  
前が云うのかい。十万二千年昔の<sup>むかし</sup>ことを考えてごらん。」

「十万何千年前とかがどうしたの。もつと前のことき、十万百万  
千万年、千五百の万年の前のあの時をお前は忘れてしまっている  
のかい。まさか忘れはしないだろうがね。忘れなかつたら今にな  
つて、僕の横腹を肱で押すなんて出来た義理かい。」

大学士はこの語を<sup>ことば</sup>聞いて

すっかり愕おどろいてしまう。

「どうも実に記憶きおくのいいやつらだ。ええ、千五百の万年の前のその時をお前は忘れてしまっているのかい。まさか忘れはしないだろうがね、ええ。これはどうも実に恐れ入おそったね、いったい誰だ。変に頭のいいやつは。」

大学士は又そろそろと起きあがり

あたりをさがすが何も無い。

声はいよいよ高くなる。

「それはたしかに、あなたは僕の先せんぱい輩ばいさ。けれどもそれがどうしたの。」

「どうしたのじゃないじゃないか。僕がやっと体たい骸かくと人格を完

成してほつと息をついてるとお前がすぐ僕の足もとでどんな声をしたと思うね。こんな工合ぐあいさ。もし、ホンブレンさま、ここの所で私もちつとばかり延びたいと思います。どうかあなたさまのおみあしさきにでも一寸取りつかせて下さいませ。まあこういうお前のことばだったよ。」

櫛ノ木学士は手を叩たたく。

「ははあ、わかった。ホンブレンさまと、一人はホルンブレンだ。すると相手は誰だろう。わからんなあ。けれども、ふふん、こいつは面白おもしろい。いよいよ今日も問答がはじまった。しめ、しめ、これだから野宿はやめられん。」

大学士は煙草たばこを新らしく

一本出してマツチをする

声はいよいよ高くなる。

もつともいくら高くても

せいぜい蚊かの軍歌ぐらいだ。

「それはたしかにその通りさ、けれどもそれに対してお前は何と答えたね。いいえ、そいつは困ります、どうかほかのお方とご相談下さいと斯こんなに立派にはねつけたろう。」

「おや、とにかくさ。それでもお前はかまわず僕の足さきにとりついたのでよ。まあ、そんなこと出来たもんだらうかね。もつとも誰かさんはできたようさ。」

「あてこするな。とりついたのでんじやないよ。お前の足が僕の体

髻の頭のとこにあつたんだよ。僕はお前よりももつと前に生れたジツコさんを頼たのんだんだよ。今だつて僕はジツコさんは大事に大事にしてあげてるんだ。」

大学士はよろこんで笑い出す。

「はっはっは、ジツコさんというのは磁鉄鉱だね、もうわかつたさ、喧嘩けんかの相手はバイオタイトだ。して見るとなんでもこの辺にさつきの花崗岩かこうがんのかけらがあるね、そいつの中の鉱物がかやかや物を云つてるんだね。」

なるほど大学士の頭の下に支那しなの六錢銀貨のくらしいのみかげのかけらが落ちていた。



学士はいよいよにこにこする。

「そうかい。そんならいいよ。お前のような恩知らずは早く粘土ねんどになつちまえ。」

「おや、呪のろいをかけたね。僕も引ひつ込んじやいないよ。さあ、お前のような、」

「一寸ちよつとお待ちなさい。あなた方は一体何をさつきから喧嘩して  
るんですか。」

新らしい二人の声

「いっしょ緒にはつきり聞え出す。」

「オーソクレさん。かまわないで下さい。あんまりこいつがわからないもんですからね。」

「双子ふたごさん。どうかかまわなないで下さい。あんまりこいつが恩知らずなもんですからね。」

「ははあ、双そう晶しょうのオーソクレースが仲ちゆう裁さいに入った。これは実におもしろい。」

大学士はたきびに手をあぶり顔中口にしてよろこんで云う。

二つの声またが又聞える。

「まあ、静かになさい。僕ぼくたちは実に実に長い間かた堅く堅く結び合つてあのまつくらなまつくらなところで一緒にまわりからののはげしい圧迫やすてきな強い熱にこらえて来たではありませんか。一時はあまりの熱と力にみんな一緒にきちが気違いにでもなりそうなのをじ

つとこらえて来たではありませんか。」

「そうです、それは全くその通りです。けれども苦しい間は人を見たのんで楽になると人をそねむのはぜんたいいい事なんではないか。」

「何だって。」

「ちよつと、ちよつと、ちよつとお待ちなさい。ね。そして今やつとお日さまを見たでしょう。そのお日さまも僕たちが前に土の底でコングロメレートから聞いたとは大へんなちがいではありませんか。」

「ええ、それはもうちがつてます。コングロメレートのはなしではお日さまはまつかで空は茶いろなもんだと云っていましたか今

見るとお日さまはまっ白で空はまっ青です。あの人はうそつきで  
したね。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、しかしあのコングロメレートという方は前にただの砂利じやり  
だったころはほんとうに空が茶いろだったかも知れませんか。」

「そうでしようか。とにかくうそをつくこととひとの恩を仇あだでか  
えすのとはどっちも悪いことですね。」

「何だと、僕のことを云ってるのかい。よしさあ、僕も覚悟かくごがあ  
るぞ。決闘けつとうをしろ、決闘を。」

「まあ、お待ちなさい。ね、あのお日さまを見たときのうれしか  
ったこと。どんなに僕らは叫さけんだでしょう。千五百万年光という

ものを知らなかったんだもの。あの時はがね鋼の槌つちがギギンギギンと僕らの頭にひびいて来ましたね。遠くの方で誰たれかが、ああお前たちもとうとうお日さまの下へ出るよと叫んでいた、もう僕たちの誰と誰とが一緒になって誰と誰とがわかれなければならぬか。一向判わからなかつたんですね。さよならさよならつてみんな叫びましたねえ。そしてたら急にパツと明るくなって僕たちは空へ飛びあがりましたねえ。あの時僕はお日さまの外に何か赤い光るものを見たように思うんですよ。」

「それは僕も見ただよ。」

「僕も見ただよ、何だつたらうね、あれは。」

大学生は又笑う。

「それはね、明らかにたがねのさきから出た火花だよ。パチツて云つたろう。そして熱かつたろう。」

ところが学士の声などは  
鉋物どもに聞えない。

「そんなら僕たちはこれからさきどうなるでしょう。」  
双子の声が又聞えた。

「さあ、あんまりこれから愉快なことゆかいでもないですよ。僕が前にコングロメレートから聞きましたけどどうも僕らはこのまま又土の中にうずもれるかそうでなければ砂か粘土かにわかれてしまっただけなようですよ。この小屋の中に居たって安心にもなりません。内に居たって外に居たってたかが二千年もたつて見れば結局

おんなじことでしょう。」

大学士はすっかりおどろいてしまう。

「実にどうも達観してるね。この小屋の中に居たって外に居たってたかが二千年も経たって見れば粘土か砂のつぶになる、実にどうも達観してる。」

その時俄にわかにピチピチ鳴り

それからバイオタが泣き出した。

「ああ、いた、いた、いた、いた、痛あい、いたい。」

「バイオタさん。どうしたの、どうしたの。」

「早くプラジヨさんをよばないとだめだ。」

「ははあ、プラジヨさんというのはプラジオクレースで青白いか

ら医者なんだな。」

大学士はつぶやいて耳をすます。

「プラジヨさん、プラジヨさん。プラジヨさん。」

「はあい。」

「バイオタさんがひどくおなかが痛がってます。どうか早く診み

下さい。」

「はあい、なあにべつだん心配はありません。かぜを引いたので  
しよう。」

「ははあ、こいつらは風を引くと腹が痛くなる。それがつまり風  
化だな。」

大学士は眼鏡めがねをはずし



半巾はんけちで拭ふいて眩つぶやく。

「プラジオさん。お早くどうか願ねがいます。只ただいま今いま気絶きせつをいたしました。」

「はあい。いまだんだんそつちを向むきますから。ようつと。はい、はい。これは、なるほど。ふふん。一寸ちよつと脈みやくをお見みせ、はい。こんどはお舌した、ははあ、よろしい。そして第十八じゅうはちへきかい予備面よびめんが痛いいたと。なるほど、ふんふん、いやわかりました。どうもこの病こわ気きは恐こわいですよ。それにお前まへさんのからだは大地だいちの底そこに居いたときから慢まん性せいりよくでい病びょうにかかつて大分おほぶん軟化なんかしてますからね、どうも恢かい復ふくの見込みこみがありません。」

病人びょうにんはキシキシと泣なく。

「お医者さん。私の病気は何でしょう。いつごろ私は死にましよう。」

「さよう、病人が病名を知らなくてもいいのですがまあ蛭ひるいし石病いしびの初期ですね、所謂いわゆるふう病の中の一つ。俗にかぜは万病のもとと云いますがね。それから、ええと、も一つのご質問はあなたの命でしたかね。さよう、まあ長くても一万年は持ちません。お気の毒ですが一万年は持ちません。」

「あああ、さっきのホンブレンのやつのろの呪のろいが利きいたんだ。」

「いや、いや。そんなことはない。けだし、風病にかかつて土になることはけだしすべて吾人ごじんに免まぬかれないことですから。けだし。」

「ああ、プラジヨさん。どんな手あてをいたしたらよろしゅうございましょうか。」

「さあ、そう云う<sup>ぐあい</sup>工合に泣いているのは一番よろしくありません。からだをねじつてあちこちのへきかいよび面にすきまをつくるのはなおさら、よろしくありません。その他風にあたれば病気のしようにつを来<sup>きた</sup>します。日にあたれば病勢がつのります。霜<sup>しも</sup>にあたれば病勢が進みます。露<sup>つゆ</sup>にあたれば病状がこう進みます。雪にあたれば症状が悪変します。じつとしていのはなおさらよろしくありません。それよりは、その、精神的に眼をつむつて観念するのがいいでしょう、わがこの恐<sup>おそ</sup>れるところの死なるものは、そもそも何であるか、その本質はいかん、生死<sup>がんとう</sup>巖頭に立って、おか

しいぞ、はてな、おかしい、はて、これはいかん、あいた、いた、いた、いた、いた、いた、」

「プラジヨさん、プラジヨさん、しつかりなさい。一体どうなすつたのです。」

「うむ、私も、うむ、風病のうち、うむ、うむ。」

「苦しいでしょう、これはほんとうにお気の毒なことになりました。」

「うむ、うむ、いいえ、苦しくありません。うむ。」

「何かお手あていたしましょう。」

「うむ、うむ、実はわたくしも地面の底から、うむ、うむ、大分カオリン病にかかっていた、うむ、オーソクレさん、オーソクレ

さん。うむ、今こそあなたにも明します。あなたも丁度わたし同様の病気です。うむ。」

「ああ、やっぱりさようでしたか。全く、全く、全く、実に、実に、あいた、いた、いた、いた。」

そこでホンブレンドの声でした。

「ずいぶん神経過敏<sup>かびん</sup>な人だ。すると病気でないものは僕とクォーツさんだけだ。」

「うむ、うむ、そのホンブレンドもバイオタと同病。」

「あ、いた、いた、いた。」

「おや、おや、どなたもずいぶん弱い。健康なのは僕一人。」

「うむ、うむ、そのクォーツさんもお気の毒ですがクウシヨウ中

の瓦斯<sup>ガス</sup>が病因です。うむ。」

「あいた、いた、いた、いた、いた。た。」

「ずいぶんひどい医者だ。漢方の藪<sup>やぶ</sup>医<sup>い</sup>だな。とうとうみんな風化かな。」

大学士は又新らしく

たばこをくわえてにやにやする。

耳の下では鉋物どもが

声をそろえて叫んでいた。

「あ、いた、いた、いた、いた、いた、た、たた。」

みんなの声はだんだん低く

とうとうしんとしてしまふ。

「はてな、みんな死んだのか。あるいは僕だけ聞えなくなったのか。」

大学士はみかげのかげらを

手にとりあげてつくづく見て

パチツと向うの隅へ弾く。

それから櫓を一本くべた。

その時はもうあけ方で

大学士は背囊から

巻煙草を二包み出して

櫓のお礼に藁に置き

背囊をしよい小屋を出た。

石切場の壁はすつかり白く

その西側の面だけに

月のあかりがうつつていた。

### 野宿第三夜

(どうも少し引き受けようが、軽率けいそつだったな。グリーンランドの成金なりきんがびつくりする程立派ほどな蛋白石たんぱくせきなどを、二週間でさがしてやろうなんてのは、実際少し軽率だった。

どうも斯こう人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いていると東京のまちのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いい



加減ほらの法螺ほらを吹いたことが全く情けなくなつちまう。どうだ、この頁けつがん岩いんぎの陰気いんぎなこと。全くいやになつちまうな。おまけに海も暗くなつたし、なかなか、流紋りゆうもんはり玻璃はりにも出でつ会くわさない。それに今夜もやっぱり野宿だ。野宿も二晩ぐらいはいいが、三晩となつちやうんざりするな。けれども、まあ、仕方もないさ。ビスケットのあるうちは、歩いて野宿して、面おもしろ白しろい夢ゆめでも見る分が得えというもんだ。）

例ならの櫛くしノ木き大学士だいがくしが

ボケツト  
衣囊いぶくろに両手りやうてを突つつ込こんで

少しせ中ちゆうを高くして

つくづく考え込みながら

もう夕方の鼠ねずみいろの

頁岩の波に洗われる

海岸を大股おおまたに歩いていた。

全く海は暗くなり

そのほのじろい波がしらだけ

一列、何かけもののように見えたのだ。

いよいよ今日は歩いても

だめだと学士はあきらめて

ぴたつと岩に立ちどまり

しばらく黒い海面と

向うに浮うかぶ腐くさった馬鈴薯いものような雲を

眺<sup>なが</sup>めていたが、又<sup>また</sup>ポケットから  
煙<sup>たばこ</sup>草を出して火をつけた。

それからくるつと振<sup>ふ</sup>り向いて

陸の方をじつと見定めて

急いでそつちへ歩いて行つた。

そこには低い崖<sup>がけ</sup>があり

崖<sup>あし</sup>の脚には多分は涛<sup>なみ</sup>で

削<sup>けず</sup>られたらしい小さな洞<sup>ほら</sup>があつたのだ。

大学生はにこにこして

中へはいつて背<sup>はいのう</sup>囊をとる。

それからまっくらなところで

もしやもしやビスケットを喰<sup>た</sup>べた。

ずうつと向うで一列涛が鳴るばかり。

「ははあ、どうだ、いよいよ宿がきまって腹もできると野宿もそんなに悪くない。さあ、もう一服やって寝<sup>ね</sup>よう。あしたはきつとうまく行く。その夢を今夜見るのも悪くない。」

大学士の吸う巻煙草が

ポツンと赤く見えるだけ、

「斯<sup>こ</sup>う納まって見ると、我<sup>わがはい</sup>輩もさながら、洞<sup>ほらくま</sup>熊か、洞<sup>どうくつ</sup>窟住

人だ。ところでもう寝よう。

闇<sup>やみ</sup>の向うで

涛がぼとぼと鳴るばかり

鳥も啼なかなきや

洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯こんなあんばいか。寝ろ、寝ろ。」

大学士はすぐとろとろする  
疲つかれて睡ねむれば夢も見ない

いつかすつかり夜が明けて

昨夜の続きの頁けつが岩がんが

青白くぼんやり光っていた。

大学士はまるでびっくりして

急いで洞を飛び出した。

あわてて帽ぼうし子を落しそうになり

それを押えさえもした。

「すっかり寝過ごしちやつた。ところでおれは一体何のために歩いているんだったかな。ええと、よく思い出せないぞ。たしかに昨日も一昨日も人の居ない処をせつせと歩いていたんだが。いや、もつと前から歩いてきたぞ。もう一年も歩いているぞ。その目的はと、はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするということはない、必ず目的があるのだ。化石じゃなかったかな。ええと、どうか第三紀の人類に就いてお調べを願います、と、誰か云つたようだ。いいや、そうじゃない、白堊紀の巨きな爬虫類の骨格を博物館の方から頼まれてあるんですがいかがでございましょう、一つお探しを願われますまいかと、

斯うじやなかつたかな。斯うだ、斯うだ、ちがいない。さあ、ところどころは白堊系の頁岩だ。もうここでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、はじめではつきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨髄だ。恐竜の骨髄だ。」

学士の影は

黒く頁岩の上に落ち

おおまた 大股おどに歩いていたら

踊おどっているように見えた。

海はもの凄すこいほど青く

空はそれより又青く

幾いくきれかのちぎれた雲が

まばゆくそこに浮いていた。

「おや出たぞ。」

榎ノ木大学士が叫び出した。

その灰いろの頁岩の

平らな奇麗な層面に

直径が一米ばかりある

五本指の足あとが

深く喰い込んでならんでいる。

所々上の岩のために

かくれているが足裏の

皺まではつきりわかるのだ。



「さあ、見附けたぞ。この足跡あしあとの尽きた所には、きつとこいつが倒れたまま化石している。巨きな骨だぞ。まず背骨なら二十米はあるだろう。巨きなもんだぞ。」

大学士はまるで雀躍こおどりして

その足あとをつけて行く。

足跡はずいぶん続き

どこまで行くかわからない。

それに太陽の光線は赭あかく

たいへん足が疲れたのだ。

どうもおかしいと思いつながら

ふと気がついて立ちどまったら

なんだか足が柔らかな

泥どろに吸すわれているようだ。

堅かたい頁けつ岩がんの筈はずだつたと思つて

榎ノ木大学士はうしろを向いた。

そしたら全く愕おどろいた。

さつきから一心に跡つけて来た

巨こきな、墓かまの形の足あととは

なるほどずうつと大学士の

足もとまでつづいていて

それから先ももつと続つくらしかつたが

も一つ、どうだ、大学士の

銀座でこきえた長靴ながぐつの

あともぞろつとついていた。

「こいつはひどい。我輩わがはいの足跡までこんなに深く入るといふのは実際少し恐れ入った。けれどもそれでも探求の目的を達することは達するな。少し歩きにくいだけだ。さあもう斯こうなったらどこまでだつて追つて行くぞ。」

学士はいよいよ大股おおまたに

その足跡をつけて行つた。

どかどか鳴るものは心臓

ふいごのようなものは呼吸、

そんなに一生けん命だつたが

又そんなにあたりもしずかだった。

大学士はふと波打ぎわを見た。

涛なみがすっかりしずまっていた。

たしかにさつきまで

寄せて吠ほえて砕くだけていた涛が

いつかすっかりしずまっていた。

「こいつは変だ。おまけにずいぶん暑いじゃないか。」

大学士はあおむいて空を見る。

太陽はまるで熟した苹果りんごのようで

そこらも無暗むやみに赤かった。

「ずいぶんいやな天気になった。それにしてもこの太陽はあんま

り赤い。きつとどこかの火山が爆発ばくはつをやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包囲しているな。けれどもそれだからと云って我輩のこの追跡には害にならない。もうこの足あとの終るところにあの途方とほうもない爬虫はちゆう虫の骨がころがってるんだ。我輩はその地点を記録する。もう一足だぞ。」

大学士はいよいよ勢いきおいこんで

その足跡をつけて行く。

ところが間もなく泥浜は

岬みさきのように突き出した。

「さあ、ここを一つ曲って見ろ。すぐ向う側にその骨がある。けれども事によつたらすぐないかも知れない。すぐなかつたらも少

し追って行けばいい。それだけのことだ。」

大学士はにこにこ笑い

立ちどまつて巻煙草まきたばこを出し

マッチを擦すつて煙けむりを吐はく。

それからわぎと顔をしかめ

ごくおうように大股おおまたに

岬をまわつて行つたのだ。

ところがどうだ名高い榎ならノ木大学士が

釘付くぎづけにされたように立ちどまつた。

その眼めは空むなしく大きく開き

その膝ひざは堅ひやくなつてやがてふるえ出し

煙草もいつか泥に落ちた。

青ぞらの下、向うの泥の浜の上に

その足跡の持ち主の

途方もない途方もない 雷らいりゆう 竜りゆう 氏が

いやに細長い頸くびをのぼし

汀なぎさの水を呑のんでいる。

長さ十間、ざらざらの

鼠ねずみいろの皮の雷竜が

短い太い足をちぢめ

厭いやらしい長い頸をのたのたさせ

小さな赤い眼を光らせ

チュウチュウ水を呑んでいる。

あまりのことに櫛ノ木大学士は

頭がしいんとなつてしまった。

「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこつちの方へやって来たのか。ああ、どつちでもおんなじことだ。とにかくあすこにらいりゆう雷竜が居て、こつちさえ見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこつそりともと戻るから。どうかしばらく、こつちを向いちやいけないよ。」

いまやなら櫛ノ木大学士は

そろりそろりとあとずさ後退りして



来た方へ遁<sup>に</sup>げて戻る。

その眼はじつと雷竜を見

その手はそつと空気を押<sup>お</sup>す。

そして雷竜の太い尾が

まず見えなくなりその次に

山のような胴<sup>どう</sup>がかくれ

おしまい黒い舌を出して

びちよびちよ水を呑んでいる

蛇<sup>へび</sup>に似たその頭がかくれると

大学士はまず助かったと

いきなり来た方へ向いた。

その足跡さへずんずんたどつて

遁げてさえ行くならもう直きに

汀に涛なみも打つて来るし

空も赤くはなくなるし

足あとももう泥に食い込まない

堅い頁けつがん岩の上に行く。

崖がけにはゆうべの洞ほらもある

そこまで行けばもう大丈夫だいじょうぶ

こんなあぶない探険などは

今度かぎりはやめてしまひ

博物館へも断わらせて

東京のまちのまん中で

赤い鼻の連中などを

相手に法螺ほらを吹いてればいい。

大体こんな計算だった。

それもまるきり電いなずまのような計算だ。

ところが櫛ノ木大学士は

も一度ぎくつと立ちどまった。

その膝ひざはもうがたがたと鳴り出した。

見たまえ、学士の来た方の

泥の岸はまるでいちめん

うじやうじやの雷竜らいりゆうどもなのだ。

まつ黒なほど居おつたのだ。

長い頸を天に延ばすやつ

頸をゆつくり上下に振ふるやつ

急いで水にかけ込むやつ

実にまるでうじゃうじゃだった。

「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食われるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあただ一つたよりになるのはこの岬の上だけだ。そこに登っておれば助かるか助からないか、事によつたら新生代の沖積ちゅうせき世せいが急いで助けに来るかも知れない。さあ、もうたつたこの岬だけだぞ。」

学士はそつと岬にのぼる。

まるで葦きのことあすなろとの

合の子みみたいな変な木が

崖にもじやもじや生えていた。

そして本当に幸なことは

そこには雷竜がいなかった。

けれども折せっかく角登つても

そこらの景色は

あんまりいいというでもない、

岬の右も左の方も

泥なぎさの渚は、もう一めんの雷竜だらけ

実にもじやもじやしていたのだ。

水の中でも黒い白鳥のように

頭をもたげて泳いだり

頸くびをくるつとまわしたり

その厭いやらしいこと恐こわいこと

大学士はもう眼をつぶった。

ところがいつか大学士は

自分の鼻さきがふっふっ鳴って

暖いのに気がついた。

「とうとう来たぞ、喰くわれるぞ。」

大学士は観念をして眼をあいた。

大き二尺の四つ角な

まつ黒な雷竜の顔が

すぐ眼の前までにゆうと突き出され

その眼は赤く熟したよう。

その頸は途方とほうもない向うの

鼠いろのがさがさした胴まで

まるで管のように続いていた。

大学士はカーンと鳴った。

もう喰われたのだ、いやさめたのだ。

眼がさめたのだ、ほらあな洞穴は

まだまつ暗で恐おそらくは

十二時にもならないらしかった。

そこで櫛ノ木大学士は

一つ小さなせきばらいをし

まだ雷竜がいるようなので

つくづくやみ闇をすかして見る。

外ではたしかになみ涛の音

「なあんだ。馬鹿にしてやがる。もうねむ睡れんぞ。寒いなあ。」

又たばこを出す。火をつける。

櫛ノ木大学士は宝石学の専門だ。

その大学士の小さな家



「貝の火けいてい兄弟商会」の

赤鼻の支配人がやって来た。

「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。大へんお早くお帰りでした。ごく上等のやつをお見あたりでございましたか、何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですからありふれたものじゃなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくわえ

雲母紙うんもしを張った天てんじょう井いを

斜ななめに見ながらこう云いった。

「うん探して来たよ、僕ぼくは一ペン山へ出かけるともうどんなもんでも見附みつからんと云うことは断じてない、けだしすべての寶石は

みな僕をしたつてあつまつて来るんだね。いやそれだから、此度こんど  
 なんかもまつたくひどく困つたよ。殊ことに君注文が割合に柔やわらかな  
 蛋白たんぱくせき石だろう。僕がその山へ入つたら蛋白石どもがみんなざら  
 ざら飛びついて来てもうどうしてもはなれないじゃないか。それ  
 が君みんな貴プレシアスオーパール蛋白石の火の燃えるようなやつなんだ。望みの  
 とおりみんな背はいのう囊うすの中に納めてやりたいことはもちろんだつた  
 が、それでは僕も身動きもできなくなるのだから気の毒だつたが  
 その中からごくいいやつだけ撰えらんださ。「  
 「ははあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、  
 そのお持ち帰りになりました分はいずれでございませうか。一ちよつと寸  
 拝見をねがいとう存じます。」

「ああ、見せるよ。ただ僕はあんな立派なやつだから、事によつたらもうすっかり曇くもつたじゃないかと思うんだ。実際蛋白石ぐらいたよりのない宝石はないからね。今日虹にじのように光っている。あしたは白いただの石になってしまう。今日は円くて美しい。あしたは砕くだけてこなごなだ。そいつだね、こわいのは。しかしとにかく開いて見よう。この背囊さ。」

「なるほど。」

貝けいの火いてい兄弟商会の

鼻の赤いその支配人は

こくつと息を呑のみながら

大学士の手もとを見つめている。

大学士はごく無雑作に

背囊をあけて逆さにした。

下等な はりたんぱくせき 玻璃蛋白石が

三十ばかりころげだす。

「先生、困るじゃありませんか。先生、これでは、何でも、あんまりじゃありませんか。」

なら 櫛ノ木大学士は怒り出した。

「何があんまりだ。僕の知ったこつちやない。ひどい難儀なんぎをしてあるんだ。旅費さえ返せばそれでよかろう。さあ持つて行け。帰れ、帰れ。」

大学士は上着の衣囊かくしから

ねずみ  
鼠いろの皺くちやになつた状袋じょうぶくろを

出していきなり投げつけた。

「先生困ります。あんまりです。」

貝の火兄弟商会の

赤鼻の支配人は云いながら

すばやく旅費の袋をさらい

上着の內衣うちポケット囊ぶくろに投げ込んだ。

「帰れ、帰れ、もう来るな。」

「先生、困ります。あんまりです。」

とうとう貝の火兄弟商会の

赤鼻の支配人は帰って行き

大学士は葉巻を横にくわえ

雲母紙を張った天井を

斜めに見ながらにやつと笑う。

# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。



# 櫛ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>